
とある魔術の衝撃吸収

カレンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の衝撃吸収

【Nコード】

N7196Q

【作者名】

カレンダー

【あらすじ】

学園都市の東雲学院高校に通う

主人公「水樹游摩」と

親友「五色獺夜」の物語である。

第1話（前書き）

ちゃんと出来ました。ヽ(´・`・)(´・`・)
編集前の前書きを読んでいない方はわけわかめでしょうが、ちゃんと投稿できたので書きました。

第1話

「学園都市」

ここは、東京都西部を切り開いて作られた都市である。

この学園都市では「超能力開発」が、学校のカリキュラムに組み込まれており。

総人口230万の八割も占める学生達が、超能力開発に取り組んでいる。

「ふう・・・、今日も学校は疲れますなあ。」

と、グチを言っている俺は、シノメガクインコウコウ東雲学院高校
ミズキユウマ高校1年生の水樹游摩だ。

「そうか？そんな疲れないだろ。」

と、返事を返してくれたコイツはゴシキタツヤ五色獺也、俺の親友だ。

俺は首を横に振りながら獺夜に言った。

「いやいや、疲れない奴はおかしいって。」

「それじゃ、俺はおかしいのか」と、獺夜が言ってきたので俺は。

「冗談だよ、冗談。」

と、返した。

「それより、ジャッジメント風紀委員に行かなくていいの？」

「そうだな、そろそろ行くか。」と、言ってて獺夜は教室から出ていった。

「さて、俺も帰るか。」

コンビニに寄ってから帰っかなあと、思いつつ街中を歩いていると

何か、人だかりができているのが見えた。

「ん、何だアレ？」

と、見てみると。

女の子が、悪そうな奴らに絡まれている。

「誰か、助けようとはしないのかねえ」と、思って周りを見るが、誰も女の子を助けようとはしない。

みんな、私は知らないといった感じで悪そうな奴らの前を素通りしていく。

「仕方ない、助けてやるか」

そう思つて、俺は不良達（今さらだが、こっちの方が良いだろう）

に声をかける。「おい、女の子相手に何してんだよ」

不良達は、こっちを見て言ってきた。

「ああ、何か文句でもあんのかよ」

「あるわけじゃないが、仕方ないから助けようしただけだ。」

「助けようとなえ、けどこの人数相手に出来るかあ」

そう言うと、不良達は一齐にこっちを見てきた。

「たぶん、大丈夫だな」

と、言い返すと不良達は襲いかかってきた。

不良達が殴ってきたが、俺は避けようとしなない。

不良の拳が、俺の身体に突き刺さった。

「偉そうなこと言つといて、突っ立てるだけかあ」

と、不良達は殴りながら言ってきた。

ドカツバキツ、不良達は休むことなく殴り続けるが、フト異変に気

づく「おい、やめろ」

不良のリーダー格が不良達に言う。

ピタッ、と不良達は殴るのを止めた。

「気絶でもしたのか」

「まあ、こんなもんだろ。」と、俺は学生服に着いた汚れを払いながら言った。

「今度は、こつちから行かせてもらっぜ！」

そう言つと、足を地面に踏みつけた。

ドツ、と音がしたと同時に何かが周りを駆け抜ける、すると不良達は倒れだし起き上がつてこない。「こんなもんだな。」

そう言つと、女の子の方を向き声を掛ける。

「大丈夫かい？」

声を掛けてから気づいたが、女の子は名門と言われる。

トキワタイ常盤台の制服を着ているじゃないか。

常盤台と言えば入学にlevel3位は必要だ。そんな高位能力者が、たかだか街の不良くらい何とかなると思つが、そんな事を思つていると。

女の子は言ってきた。

「あんた何、人のじゃましてんのよ。」

じゃま？助けたのにじゃま扱い？そう思つていると

「あいつが来るかもしれないから、わざわざ絡まれたつて言つのに何すんのよ！」

と髪の毛の辺りからバチッピリッと、電気がはじけている。

これはヤバイ、そう思つた俺は速攻で体勢を立て直して逃走した。

「ちよつ、待ちなさいつてば」

と、電撃を撒き散らしながら俺を追いかけてきた。

「クソツ、何でこうなんだよ！」あれから何十分経つたことだろうか。限界だ、少し休もう。喉もカラカラだ。

自販機でもないかと、周りを見回すと自販機オアシスを発見した。「これで、勝つる！」

そう叫び自販機にダッシュで近寄る。自販機に近寄ると不吉な制服を着た女の子がいるではないか。「違う、他人のそら似だ」と言い聞かせ、後ろに並ぶと。

自販機からジュースを取つて振り向いた女の子と目があつた。

数秒間目が合う、すると他人のそら似さんが叫んだ。

「……あーっ、あんたさっきの」

游摩も叫ぶ

「・・・あーっ、さっきの電撃女（追いかけて来たのでランクダウン）」「電撃女じゃない。私の名前は、御坂美琴！」
と、御坂とやらが言ってきた。

「ん・・・、御坂？」

常盤台の制服に御坂美琴エレクトロマスターつて名前、しかも電撃使い

「もしかしてお前レールガン超電磁砲か？」

そう言うのと御坂は、

「そうよ。私がlevel5の超電磁砲、御坂美琴よ。」

超電磁砲、level5の第三位、こんな女の子だと思わなかった。

「俺は、水樹游摩だ。」

「ふ〜ん、水樹游摩ねえ。じゃあ游摩つて呼ばせて貰うわ。」

「俺は高校生だから先輩をつけなさい」

と、若干怒りぎみに言うのと、

「分かったわ、游摩先輩」

意外と素直に先輩をつけてきた。「私は、御坂でいいわ。」

「わかった、御坂。」

打ち解けたことで疑問になっていたことを話す。

「なあ、さっき助けた時に言ってたアイツって誰なんだ？」

すると御坂は機嫌を悪そうにして言った。

「アイツは、アイツよ。」

「アイツじゃよくわからんわ」とツツコムと、御坂はアイツとやら

に会った出来事を話し始めた。

話を聞いたが要約すると、不良にからまれてた御坂を助けようとしたソイツが御坂の逆鱗に触れたらしく電撃を不良達ごと浴びせたが何故かソイツだけは無事だったという。

「別に、おかしくは無いんじゃないか？」

levelの高い能力者だったなら防ぐ事くらいはできんじゃないのか？」「私もlevelを聞いたけど、アイツ自分のことlevel

e10って言ったのよ。」

level0がlevel15第三位の攻撃を受けてまったくの無傷、興味湧いてきたぜ。

「御坂、お前アイツとやらを探してるんだろ。」

と、言うつと御坂は

「まあ、探してるわ。」

アイツとは決着をつけないと気が済まないからね。」

俺は御坂に言った。

「俺もソイツに興味湧いた。」

御坂、俺も探すのを協力してやるぜ。」

すると御坂は

「協力してくれるんなら、ありがたく協力してもらおうわ。」

ただし、と御坂は言った。

「アイツと決着をつけるのは、私が先だからね!。」

俺は生返事で返す。

「へいへい、わかったよ。」

それよりケータイ持つてるか?」「携帯電話?持つてるけど、それ

がどうしたのよ。」

「連絡先教えてくれよ。」

ソイツに会った時にお前に連絡できないじゃん。」

「わかったわ、アイツ見つけたらすぐに連絡しなさいよね。」

こうして俺は「超電磁砲」、御坂美琴のアドレスをゲットしたのであった。

ガチャツ、ドアを開けて真っ先にベッドに突っ込む。

「ふいふ、今日は疲れたわ、いつも以上に。超電磁砲の攻撃が効かないlevel0・・・か。」

どんな奴なんだろうか。そんな事を思いながら夢の世界に落ちていく。

第1話（後書き）

どうでしょうか？

読める文章だったでしょうか？

まだ第2話ですが随時、感想・アドバイスを待っています。

まあ一旦この話しは置いて、主人公の説明をしましょうかね。
名前

水樹游摩「ミズキユウマ」

能力名

衝撃吸収「ドレインショック」

level3

東雲学院高校の一年生

性格

作者もよく分かりません（笑）

とりあえず頑張って書いてきますので、よろしく願います。

＼（、、）ノ お気に入り

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7196q/>

とある魔術の衝撃吸収

2011年10月8日17時44分発行